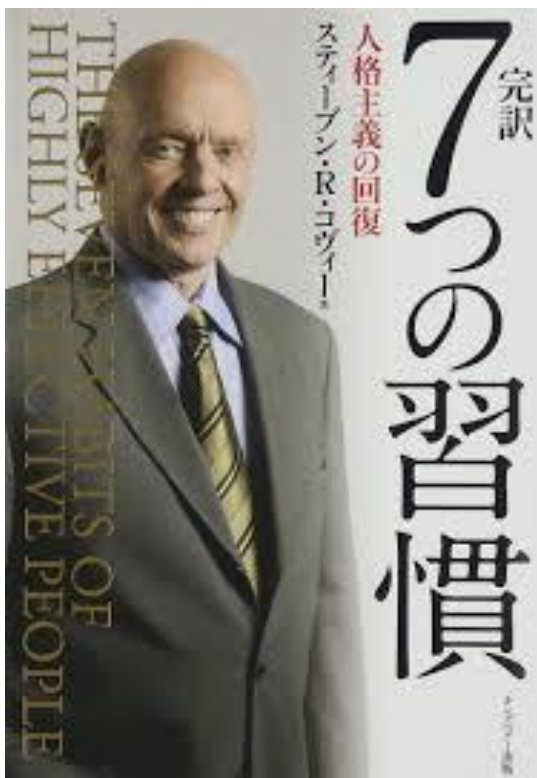




# ゴールを思い描くところから



- |       |                   |
|-------|-------------------|
| 第1の習慣 | 主体的に考える事          |
| 第2の習慣 | 終わりを思い描く事から始める事   |
| 第3の習慣 | 最優先事項を優先する事       |
| 第4の習慣 | win-winを考える事      |
| 第5の習慣 | まず理解に徹し、そして理解される事 |
| 第6の習慣 | シナジーを作り出す事        |
| 第7の習慣 | 刃を研ぎ続ける事          |

世界的ベストセラーである『7つの習慣』。  
すでにお読みになった方もいると思います。  
あるいは、「読んだけれども内容が思い出せない…」という方もいるかもしれません。  
結論から言えば、「上に書いた 7 つの習慣を身につけると、幸せな人生が送れるよ」という本です。

ちょっと付け加えると、夢を実現すること、仲間とつながること、前向きに楽しく生きていくことなどが、劇的に実現していきますよ、という本です。

これからの学校生活のことに関しても、重要な内容がてんこ盛りの良著のため、そのエッセンスを紹介します。

今回は、第 2 の習慣「終わりを思い描くことから始めよ」について。

実は、これまで7つの習慣ともいずれかの形でコスモスハーモニーに登場しています。

それくらい、私も影響を受けている本です。

その中でも、小学校の内に最優先で学んだ方がいいと感じているのが、この第 2 の習慣です。

「終わりを思い描く」とは、ゴール（目的）を設定することです。

いくら努力を積んでも、練習を続けても、その方向性が誤っていた場合、すべてが水の泡になってしまうことがあります。

あるいは、目的の無いままに何となく取り組みを続けている時は、間違っただけに進んでしまうこともしばしばです。

例えば、世界的な企業に共通していることとして、「目的が明確化」されていることが挙げられます。

何の為に会社が存在しているか。

どこに向かって我々は働いていくのか。

そのゴールが明確に決められていることは、「重要」ではなく「必要」であるとされます。

このゴールは、「企業理念」や「行動指針」などとも言い換えられます。

では、それらの会社は一体どんな目的やゴールを定めているのか。

Google は？

パナソニックは？

Microsoft は？

普段よく聞くこれらの会社がどんな目的を掲げているのか。

下のページに進む前に、一度想像してみてください。

では、いくつかの企業理念を紹介します。

### Google

世界中の情報を整理し、世界中の人々がアクセスできて使えるようにすることです

### Facebook

人々に共有する力を与え、よりオープンで繋がった世界にすること

### HubSpot

世界をもっとインバウンドにして、次々にビジネスの改革を押し進めること

### Microsoft

世界中のすべての人々とビジネスの持つ可能性を、最大限に引き出すための支援をすること

### Coca Cola

世界をリフレッシュさせ、前向きさと幸福の瞬間を起こし、価値を生み出しと違いを作り出すこと

### Panasonic

産業人たるの本分に徹し社会生活の改善と向上を図り世界文化の進展に寄与せんことを期す

### McKinsey

顧客企業の抜粋で永続的で重大な業績の成長を助ける、また優秀な人材を惹きつけ、作り、興奮させ、長く留まるファームを作る

### 悪い例

「素晴らしい製品を作り顧客のニーズに応える」（あまりに一般的すぎてダメ）

子どもたちにこうした情報を紹介する時は、「もしも気になる企業があれば、自分で調べてみるといいですよ」という話を合わせて伝えます。

もしかしたら、その目的に物凄く魅力を感じたり、共感を覚えたりすることもあるかもしれないからです。

本来、どんな仕事がしたいか、あるいはどんな会社で働きたいかということは、こうした「目的」から決めるのが良いはずです。

どこに向かっていくかというゴールが、それなのですから。

行先が決まっている船に乗ってから「本当はそんな所に行きたくなかった！」と途中で駄々をこねても、誰も取り合ってくれません。

最初に行先を確認するのは大切な自分の責任です。

あるいは、行先のはっきりしない船に乗って、「なんでいつまでたっても到着しないんだ！」と憤慨している姿も同じです。

行先が決まっていないのですから、到着しなくて当たり前です。

最初に確かめなくてははいけません。

船の行先を、です。

そして、自分の考えも確かめる必要があります。

乗船の目的を、です。

みんなが乗るから何となく…。

他の誰かに進められたから…。

よく分からないけどひとまず乗ってみた…。

こういう乗り方ではなく、どこへ向かうために、あるいは何を成し遂げるためにという目的をハッキリさせることが重要だということです。

今は船に例えましたが、人生はこうした「選択」「決定」の連続です。

部活に入るのか・入らないのか。

高校に行くのか・行かないのか。

どんな勉強に力を入れるのか。

人生の壁にぶつかった時はどうするのか。

どんな仕事をするのか。

人生をどのように生きていくのか。

目的が定まっている人は、たとえ大きな波が来ても、コンパスが動かなくなった時でも、きっと力強く歩みを進めていけます。

書籍の中から、関連する一節を紹介します。

人生の目的を設定することは、なかなかの難題です。

自分の生きかたは自分で決められるのに、多くの人はそれを忘れ、無意識に他人が決めた脚本通りに生きています。

そして、人生の終わりに後悔します。

そうならないためには、「自分自身の人生の脚本づくり」を意識する必要があります。

そして、目的を明確化させることが大切です。目的があいまいだと、必要な行動といらぬ行動の選択基準もあいまいになります。

これでは目的の達成にむかえません。

目的がはっきりするだけで、やるべきことの区別がつき、主体的に選択し、目的の達成に近づくのです。

さて、「どこに向かっているか」というゴールが企業理念として存在するように、学校にも同様の目的地が存在します。

それは、「建学の精神」だったり「学校の教育目標」と記されたりします。

例えば、私が以前勤めていた札幌の小学校では、次の3つの目標がありました。

すすんで学ぶ子  
思いやりのある子  
明るくたくましい子

この3つの資質を育成することが、その学校においては大切なゴールだったということです。

短い単語に直すならば、「意欲」「親切」「明朗」などとなるでしょうか。公立小学校ではよく見る形の目標です。

他にも、札幌の前に務めていた奈良の私立小学校の教育目標はこれでした。

朝起き  
正直  
働き

朝起きとは、朝自分の力で起きることです。それを習慣化することが、自立の一步だと教えられていました。

正直とは、嘘をつかないというよりも「素直」という意味合いで使われていました。学んだことや教わったことを素直に受け取る姿勢のことです。

働きとは、「はたはた(側々・傍々)の者を楽しませる」ところに由来するとも言われています。「周りの人を喜ばせる」という意味です。

これらのことを、また短い単語に直すならば、「自立」「素直」「利他」などになるかと思います。

小学校の例だけでなく中学校の例もあげてみましょう。

おそらく、今日本で一番注目を集めている公立中学校は、東京都にある麹町中学校です。ホームページから、教育目標に関するところを抜粋します。

本校の教育目標は、「自律」、「尊重」、「創造」です。

「自律」とは、自分で考えて、判断し、自分で行動できることです。

「尊重」とは、みんな違っていることを理解し、相手を尊重することです。このことは学校生活を楽しいものにしてくれる基盤となるものです。

「創造」とは、豊かな発想で、新たな価値を生み出すことです。まさにこれからの社会で求められているものです。

このように見てみると、各学校でそれぞれ目指しているゴールが違ってくるのがわかります。

では、SOLAN 小学校のゴールとは何だったのでしょうか。

建学の精神は、以下のものです。

### グローバルシチズンシップの育成

グローバルシチズンシップとは、国連が中心となって世界に呼び掛けている言葉でもあり、「地球市民意識」とも訳されます。

地球市民意識をもう少しみ砕くと、「誰もが地球社会の一員であり、そこに参画する責任を持つ市民だという意識」となります。

地球市民としての責任を持つ意識。

それは言い換えるなら、その責任を果たすために自分自身に何ができるかを考え、行動できる力であるともいえます。

現代の日本の学校教育においては、この意識を育むことが難しい現状があることがすでに広く指摘されています。

画一的な指導、強い同調圧力、遅れた ICT 活用、過度なゼロリスク主義、そして薄れ続ける当事者意識。

「自分が何とかする」ではなく、「誰かが何とかしてくれる」という感覚が現在日本には蔓延しているとも言われます。

その原因の一つに、日本の学校教育が抱える問題が関係していることは間違いありません。

私は以前、自著に次の原稿を書いたことがあります。

この原稿を書いている現在、テレビやネットニュースで「親ガチャ」という言葉が話題になっています。

「親ガチャ」とは自分で親を選ぶことはできず、どういう境遇に生まれるかは運任せといったことを意味する言葉です。

何が出るかわからないカプセル式のおもちゃに例え、「親ガチャ」と呼ばれます。

裕福な家庭に生まれれば当たり。

貧困家庭に生まれれば外れ。

優しい親のもとに生まれれば当たり。

厳しい親のもとに生まれれば外れ。

親の当たり外れによって人生が決まってしまうことを揶揄するような表現で、連日多くの番組やネットページで激論が交わされています。

他にも、担任ガチャ、時代ガチャ、国ガチャなんて表現もあります。

この一連の「ガチャ」という表現には、「当事者意識の希薄化」という現

代社会が抱える大きな課題が影響しているといわれます。

現代の日本は、あらゆる面で「豊かさ」に溢れています。

食べ放題、使い放題、歌い放題、飲み放題、定額、サブスク…。

ものやサービスが溢れ、「ものの有難み」はどんどん失われています。

そして、「有難い」と思える意識が薄れるのと比例するように、「自分の生き方が自分の人生を作っている」という当事者意識も薄れていったのではないかと思います。

その代わりに強くなってきたのは、「当たり前意識」と「お客様意識」です。

サービスが豊かなのは当たり前。

サービスが丁寧なのも当たり前。

その上質なサービスを受けるのはお客様として当たり前。

こういう感覚になった時、人は簡単に人を責めるようになります。

自分というお客様に責任はなく、サービスの提供者に常に責任があるかのように考えるからです。

ガラガラポンで出た環境によって人生は決まってしまうという「ガチャ感覚」の根底には、このお客様感覚があるように思います。

本当なら、環境の差とは人生で与えられた単なる一条件に過ぎないはずで

す。その条件のせいばかりにすることは、人生は常に環境次第・運しだいで全てが決まってしまうっており、自分の努力には何ら意味が無いと認めているようなものです。

しかし、少なからずそうした考えが蔓延してきているからこそ、「ガチャ」で人生が決まってしまうと思う若者が増えているのだと思います。

自分の行動こそが世界を変えていくことができる。

自分の提案こそが世界を変えていくことができる。

そうした体験の積み重ねこそが、目の前に出現した課題に対して「自分が何とかする」という主体的な行動選択を生み出していくのだらうと思います。

変化のスピードがどんどん速く、激しくなる現代において、そうした主体性をもって人生を切り開いていける人こそが、世界で通用・活躍できる人なのだと考えています。

そうした、行動型・提案型の力を磨いていくことが、グローバルシチズンシップの育成につながるのだと思います。



先日、探究の発表会の後に、何人ものお家の方から感想を伺いました。

「これだけ質疑応答ができるようになってきていることに驚きました。」

「前日までとても緊張していましたが、立派に大舞台を乗り越えた姿に感動しました。」

「私が考えていたよりもずっとたくましく発表ができていました。」

「1年生でもこんな風に自分の思いを伝えられるようになるんですね。」

SOLANのカリキュラムデザインは、まさにこの点にこそ重点が置かれています。自ら行動や提案ができる力を育むために、全ての教育活動が設計されているということです。

入学者ハンドブックには、次の記載もありました。

自ら問いを持ち、とことん追究・思考し、議論できる子 多様な価値観を尊重し、合意形成や意思決定できる子 未来を切り開く意思を抱き、持続できるたくましい子
---

短くまとめるならば、「探究心」「多様性」「意志力」となるでしょうか。こうしたゴールに向けて進み続ける上に、入学前のプレゼンにもあった

15歳の春に自らの夢を語り、進路を自己決定できる子ども
-----------------------------

を実現するべく、開校から1年半ほどの歩みを始めたところです。

私は、先日の1年生の探究発表会を見ていて改めて思いました。

SOLANでやっていることは、他の日本の学校ではほとんど実現できないことばかりだということを、です。

全国多くの学校や、世界の色々な学校を見てきて思いますが、これだけ「行動型・提案型」にこだわって学校を創っているところは私は今の所見たことがありません。

もちろん、船出を始めたばかりの学校においては、改善点や課題が日々沢山出てくることも事実です。

そうした諸々の課題を乗り越えながら共に力を合わせて学校を創っていく中で、「グローバルシチズンシップの育成」の達成を目指しているのがSOLAN小学校なのだと、私は解釈しています。

色々な諸課題が起きてきた時こそ、ついつい「どこに向かっているのか」という大切な目的地を見失ってしまうことがあるため、スティーブンコビーの著作から今考えているところを少しだけ書いてみました。



ちなみに、日本にはかつては「立志式」という行事がありました。（今も地域によっては実施しているところがあります。）

### 現在の立志式の内容

入学式や卒業式のように学校行事の一つとして取り入れている地域が多いようです。

各地域や学校によって内容もそれぞれ違いますが

大体は14歳（中学2年生）になる生徒と職員、保護者などの出席のもと1月から2月頃に開催されます。

校長先生の話やゲストによる講演を聞き、

生徒たちによる将来への決意や目標の発表、合唱などが行われることが多いようです。

立志式の始まりには諸説あります。

そのうちのひとつは奈良時代から行われている**元服の儀**（今で言う成人式）が元となっているというもの。

### 元服の儀とは

奈良～平安時代頃、11～16歳前後になった男子は大人になった証として着物や髪型を大人のものに変え、冠をかぶる儀式を行いました。

平安期になると冠は烏帽子になり室町～戦国時代には前髪を剃る形式へと徐々に簡略化されていきましたが、

どの時代でもおおよそ**15歳前後が成人**と認められていました。

これは、その字の通り「志」を「立てる」式です。

志（こころざし）とは、「どのように生きていくかという決意」です。

先に紹介した「7つの習慣」の二つ目「終わりを思い描くことから始めよ」では、「人生の目的」を見つけるためのアクションが求められます。

それは、まず自分が「どんな最期をむかえたいか」を考えることです。

すると、自分にできること、自分が大切にしていることは何かをはっきり意識することができます。

今後の人生を力強く歩んでいくために、行先や目的を明確にする力は否応なく必要になってきます。

かつての日本人ができていたことが、現代の日本人においては難しくなってきた現状があります。

それこそが、「自分が何とかする」ではなく「誰かが何とかしてくれる」という当事者意識の希薄化として表れてきているのでしょう。

だからこそ、「15歳で自分の夢を語り進路を選択できる」ということが大切な一つの指標になるのだと思います。

入学説明会やハンドブックで語られてきたこうした「目的地」を見失わないようにこれからも歩みを続けていこうと、先日の探究発表会の様子を見ていて改めて思った次第です。

さて、先日もお家の方からお便りを頂戴しました。  
一通だけ紹介させていただきます。

渡辺先生

お世話になっております。

12月5日よりバス通学から電車通学に変更して、毎日、朝と夕方送り迎えをしています。朝は、〇〇ちゃんに「おはよう」と笑顔で挨拶してもらえると緊張から解き放たれるようで、少しホッとしています。

大曽根からの電車通学にまだまだ不安はありますが、もっと仲間が電車通学になってくれると、安心にかわってくる気がします♪

朝は、借りて来た本を読みながら通学しました。電車が混雑しているので、座れるように〇〇と作戦や分析をして、どこに並ぶと座れやすいかを話すのも新たな発見でとても楽しいです。

子供達が怖い思いをしないように何を予防策としているか次のソランカフェで聞いてみたいと思いました。

写真は本日、アフターの帰りの電車の中の風景です。  
とても楽しそうです。

電車通学の様子、教えていただきありがとうございます。

私も、バスにはいくつかの路線で乗って様子を見てきましたが、電車で大曽根辺りからは乗ったことが無いので、今度様子を見に行きたいと思います。

お家の方とお子さんと、色んな話し合いを経て至った一つの選択であり、行動であるのですね。

我が家も4年生と1年生の娘が距離は短いながらも電車で通学しています。最初は駅まで毎日歩いて見送りに行きましたが、最近は二人でたくましく乗車ができるようになりました。

それこそ、乗る前には休日を使って瀬戸電に乗って下りる練習をした日のことが懐かしいです。

登下校時のお子さんの様子、変化や成長など、またいつでも気軽に教えていただければ幸いです。

[1 学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ \(google.com\)](#)